



博物館の「目からウロコ」とは？

～ 実習生の感想～

今年は新たに札幌市立大学からの学生さんも加わり、4大学から計9人が学芸員実習にきました。最終日に、博物館や学芸員について「目からウロコが落ちた」と思ったことを実習生に書いてもらいました。



○ (市立大学3年)

標本の一点一点が想像していたよりずっと多くの時間を費やされ、沢山の情熱と愛情が注がれていることを知りました。また、それだけの情熱と愛情がないと学芸員や研究者になれないと感じています。

○ (酪農学園大学4年)

実習を通して感じたのは、学芸員の仕事はたくさんあり、展示を企画してそれを実現することの大変さでした。自分の伝えたいことを展示にしてお客さんに分かるように伝えるのは本当に難しいなあと思いました。

○ (市立大学3年)

化石クリーニングは力と繊細さが必要な難しい作業で、化石が簡単に出てくるわけではありませんが、辛抱強く時間をかけて続けることによっておのずと結果は現れてきます。これはまさに、学芸員の仕事の本質なのではないでしょうか。「継続の力」を肌で感じた実習でした。

○ (市立大学3年)

学芸員の仕事の多様さが最も印象的で、展示製作から標本の整理まで、学芸員は看板役者と裏方の一人二役を行っていて、大変さやりがいを感じました。自己と他者の会話から得た物を博物館の質の向上につなげていくのも学芸員の一側面なのかと思いました。

○ (武蔵女子短大2年)

この博物館実習は、驚きと発見の連続でした。化石のクリーニングでは様々な方法があり、どの方法も時間と根気が必要な作業でしたが、発見できたときは本当に嬉しかったです。

○ (市立大学3年)

なによりも驚いたのは情報量の多さです。収蔵庫には化石、昆虫、植物などありとあらゆる自然の歴史を記す貴重な情報が保存されていて博物館の役割の大切さを身をもって知りました。この2週間は自然史系資料の魅力にはまっていきました。

○ (市立大学3年)

何万年も前の生物の化石が形をほぼ崩さぬままに残っているという事が感動的でした。ずっと昔から生命があるからこそ今の生命があり、その神秘的な時空のつながりを実感できる場所が、博物館という空間なのではないかと思えます。この貴重な空間を多くの人に体験してもらいたいです。

○ (市立大学3年)

一般の方から寄贈された多くの資料には驚かされました。博物館資料は専門家が集めたものという固定観念を持っていた私にとって、自然科学に興味を持つ一般収集家の存在は興味深いものでした。博物館とは熱意を持った多くの人々が関係し合うことで知識や経験を深められる場所だと感じました。

○ (北翔大4年)

収蔵庫にはたくさんの化石や植物があり、普段私たちが見学できる展示室にあるものはほんの一部でしかないことを知ってとても驚きました。博物館は多くの命に支えられているところだと思いました。過去があるからこそ今があるので、それらを大切にしたいです。